

お別れのことば

中林 一樹

(東京都立大学／首都大学東京名誉教授、明治大学特任教授)

石田頼房先生がご逝去されて、はや1年が経とうとしています。日本の都市農村計画研究分野にぽっかりと空いた穴は、そのままに過ぎているように思います。

石田先生は、関東大震災からの帝都復興事業が完成し、東京市が周辺市町村を併合した1932年に、東京都国分寺村でお生まれになられました。幼少期はやはり日本の“小国民”として成長され、やがて戦時を迎え、「最も近道なので、電車がめったに来ない中央線の線路を歩いていて、アメリカの戦闘機から機銃掃射を浴びたこともあったよ」と、あまり戦中の話をされませんでした。ゼミ合宿の折だったと思いますが、お話になられたことがありました。

終戦の後、先生は都立西高等学校に入学、卒業されて、東京大学工学部建築学科に進学され、1955年に卒業されました。先生の大学時代の東京は、石川栄耀の指導立案した戦災復興計画がほとんど実現されないまま無秩序に被災市街地に住宅が再建され、郊外でも緑地地域に市街地がスプロールしていました。戦災による膨大な住宅不足の解消を目指して日本住宅公団が設立される一方、計画的戦災復興がほとんどできなかった東京では、東京都が行うべき東京の都市整備を、国の首都建設として取り組む首都建設法が制定され、首都建設委員会で検討されていました。しかし、東京都の範囲のみを首都建設の対象とする同法に対して、首都として都市整備には不十分であると、4都県を首都圏として取り組むべしという「首都圏整備構想案」が首都建設委員会から公表されていました。

学部を卒業して大学院に進学された石田先生は、都市計画を専攻して高山英華研究室で研究に取り組みはじめられました。修士課程では学生による農村調査活動に参加され、木曽農村総合調査(上松町)の折にお茶の水女子大学の地理学科におられた裕子夫人と出会われました。“高山研で最も勉強していたのは石田さんだったよ”と何人もの当時を知る先生方からお話をうかがいました。博士課程に進学された石田先生は、1960年3月に東京大学に博士論文「大都市周辺地域における散落状市街化の規制手法に関する研究」を提出されて、4月から東京都立大学工学部建築学科に助手として着任されました。丹下健三の「東京計画1960」が発表され、市街地改造法が公布された1961年に、工学博士を授与され、大学院を修了されましたが、石田先生は1960年4月から1995年3月までの35年間、東京都立大学において教育と研究を通して、私たちには受け止めきれないほどの教えをいただきました。石田先生は、助手1年目から、先生の恩師、高山英華先生の東京都立大学非常勤講師としての授業を代講されていたと聞いています。石田先生曰く「最初の講義は高山先生がお話くださったが、『石田君、後は宜しく』と、その後ずっと代講させていただくことになってしまった」とのことでした。これが石田先生の東京都立大学での教育の始まりでした。1967年に助教授に昇任されますが、川名吉門教授が大阪市立大学から東京都立大学に着任され、カリキュラムの再編もあり、1970年ころから「住宅地計画」と「都市計画史」の授業科目を担当されるようになりました。

大学院時代から東京都立大学教員としての1960年代の石田先生の主たる研究対象は、石田先生の研究業績からうかがうと、都市の市街地よりも近郊農村地域でした。大都市周辺では近郊農村地域に猛烈な勢いで市街地が拡大していく時代でもあり、無秩序な都市化を規制する土地利用秩序化のための都市計画研究や計画的提案に取り組まれていました。この1960年代における石田先生の東京近郊地域での土地利用の変容や計画的な都市形成のための即地的な調査とその都市計画的論考に対して、1962年には博士論文で日本都市計画学会石川奨励賞(論文調査部門)を受賞、また1965年には実施計画としての地域計画と集落空間設計であった「八郎潟干拓地新農村集落計画」で、日本都市計画学会設計計画賞を浦良一先生、井手久登先生と共同受賞しておられます。

私が先生とお会いしたのは1970年に東京都立大学大学院に進学したときでした。それは、自動車時代が到来して東京では光化学スモッグが社会問題となる一方、新都市計画法が制定され、都市近郊地域での土地利用制度として、石田先生が博士論文で提案されていた4段階の区域区分とは大きく異なりましたが2段階の区域区分制度が導入され、市街化区域では用途地域が細分化され、建築物の絶対高さ規制が廃止されて容積率規制が導入された時期でした。

また、美濃部亮吉知事による東京都政において「広場と青空の東京構想」が発表されたところで、神奈川県は長洲知事、横浜市は飛鳥田市長と革新自治体の時代でした。新都市計画法でも住民参加が規定されるなど、大きく都市政策の策定理念とプロセスが変革した時期でもあり、石田先生は非常にお忙しくしておられましたが、大学院のゼミでは、革新自治体における都市政策、住宅政策を取り上げていただきました。

高度経済成長のクライマックス期の東京では、容積率制度を活用したマンション開発が盛んで、日照問題が多発し、都市成長が都市計画の枠をはみ出していった時代に、東京という都市成長の^る坩堝のような現場で、石田先生から多くのことを学ばせていただきました。

1975年に私は東京都立大学理学部地理学科の助手に転じました。しかし、石田先生と私との接点は繋がっていきました。東京都立大学には科学研究費で始められた先生方の都市研究会が、東京都から都市研究費を受けて活動する都市研究委員会となり、石田先生も参加されていました。この学部を越えた学際研究の場であった都市研究委員会の活動を通して、先生との接点は継続していました。1977年には大学の研究組織としての「都市研究センター」となり、研究紀要である「総合都市研究」を発行することとなって編集をお手伝いさせていただくことになり、そして専任教員が定数化された1984年に、石田先生は建築学科を離れて都市研究センター教授に着任されました。

この1960年代後半から1970年代にかけて、石田先生は建築学科での教育とともに、新都市計画法という都市計画がどのように社会に実装され、奔走する都市がもたらす都市空間と土地利用の混乱をどのように制御していけるのか、制度技術としての都市計画研究に実践的に取り組まれておられたのだと理解しています。それらの「市街地形成とその規制手法に関する一連の研究」で、石田先生は1983年都市計画学会論文賞を受賞されました。

先生が続けてこられた、都市爆発ともいえる都市成長の時代に、そこに形成される都市空間を望ましい空間形態に導くにはどのような計画の技術と制度が必要なのかを考究し提案する「都市計画研究」に対し、1980年代前半には中曽根規制緩和・民活の時代を迎えました。先生はこれを「反計画の時代」と定義されました。「都市空間の発展法則性に働きかけて都市空間を制御する」と先生が言われた計画の役

割、その制御とは「都市をめぐる要望の矛盾を調整し、規制手法によって「予測される結果を変え」望ましい将来像を導く」ことである、と私は理解しています。そうした“力”を持っているはずの都市政策・都市計画の枠組みに対して、規制緩和・民活の手法は「都市計画の無“力”化」に他ならない。それを、先生は“反計画”と定義され、その“反計画”に対し、計画への“反転のバネ”として「未来を切り開く鍵を歴史に学ぶ」研究に大きく視線を転回されたのだと理解しています。“先生、違いますか？”

1987年、先生は建築学科での講義録をもとに『日本近代都市計画の百年』を刊行されました。これは全国の都市計画を学ぶ者の必読入門書となりましたが、同時に、それまでの研究を集大成した『日本近代都市計画史』を研究書として刊行されました。1980年代に、石田先生は軸足を「都市計画研究」から「都市計画史研究」に大きく転回されていきました。

そして、石田先生は、日本の都市計画史研究を進められる中で、改めて日本の都市計画が欧米に多くを学んできたことに関心を寄せられ、日本と海外での都市計画の歩みの比較研究の視点が重要であると、1980年代後半以降、海外の学会での発表など積極的に研究成果を海外に発信されました。

石田先生の都市研究センター教授就任は、先生にとっては教育の現場から研究の現場にも重点を置くことでもあり、先生の研究の大きな転回期になったと理解しているのですが、同時にそれは、先生が新たな大学教育を発想し、その実現を目指すことになった時期にもなっていかれたと考えています。それは、学部学科という“ディシプリン”に所属せず総合的に都市を研究し、都市づくりを担う、そんな人材を育成する独立大学院の設置でした。その設置が学内で、そして東京都でも認知されて、準備が本格化した1993年、私は地理学科から都市研究センターに着任させていただき、文部科学省への大学院の設置申請を一緒にさせていただくことになりました。

どのような専攻名にするのか。「都市〇〇学」という“系統科学(〇〇学)の一分野としての学”の単なる集合ではなく、むしろ「〇〇の都市学」という“系統科学としての都市学”を目指そうと「都市科学」で、Urban Sciences(複数)ではなくUrban Science(単数)で申請しようと、そのような議論をさせていただきました。そして、1994年4月、東京都立大学・独立大学院「都市科学研究科」が設置され、石田先生は研究科長として新しい都市研究と都市づくりにかかわる人材育成の場を開かれました。でも先生の定年まで1年しか残されていませんでした。1995年3月、阪神・淡路大震災から2か月その渦中に、先生は東京都立大学を退職されました。そのあと工学院大学特別専任教授として1999年3月まで、先生は教育・研究の場を移されました。

このように、先生は都市科学という総合的学際的人材育成の場と都市研究の場の構築に尽力されましたが、同時に、先生の都市計画史研究は大輪の花を咲かせました。1980年代に精力的に取り組まれた都市計画史研究の業績から「日本近代都市計画史に関する一連の研究」で、1991年に日本建築学会論文賞を受賞され、さらに、2001年には都市計画学会功績賞を受賞されました。そして、2004年に「我が国における近代都市計画史の研究とその発展に尽くした功績」に対して、日本建築学会大賞を授与されました。

この2004年には、阪神・淡路大震災からの復興の取り組みと、21世紀の都市農村計画の展望を増補されて『日本近現代都市計画史の展開—1868～2003—』を刊行されています。東京都立大学の最終講義「2019年への都市計画史」において、計画の役割に関して“地獄絵に向かうトレンドからの脱却”があるが、「地獄絵は何とんでも東京に直下型地震が起きると想定すれば、地獄絵が出現する、ということだが、地獄絵を想定することはしないでおこうと思っていた。それに、2019年までにはそんな事態は起こ

らないであろうとも考えていたのです。が、阪神・淡路大震災の現実、東京でもいつ起こるかしかないということを再認識させられました。」と述べられておられます。そのことが、『日本近現代都市計画史の展開—1868～2003—』に阪神・淡路大震災の復興の取り組みを増補された背景でもあったと思います。そして、先生が病に倒れられてまもなく、東日本大震災が発生しました。先生の意識が戻られましたら、何を思われたでしょうか。いよいよ次は東京であろうと。

首都直下地震もいつ起きても不思議ではない状況が高まっています。

日本建築学会大賞受賞のお祝いに際して『展望と計画のための都市農村計画史研究』という冊子を作られました。その挨拶状に、次のような言葉がございました。

「……、受賞のタイトルの後半を見れば、日本近代都市計画史の研究が多くの研究者の努力によって発展しているという事実があって、私の受賞があったということは明らかです。……日本建築学会には都市計画委員会のもとに都市形成・計画史小委員会があり、……土木学会では土木史研究委員会が活動を継続し、……建築学会や都市計画学会の論文集には都市史・都市計画史関係の優れた研究論文が数多く見られます。このような活動があってこそ、近代都市計画史研究の分野から、このような賞の受賞者が出ることになったのだと思うのです。

そのことをよくわきまえて、今後もなおしばらく、都市農村計画史の分野で、自分自身の研究を深めると同時に、研究分野の皆さんと協力して、この分野の研究が発展するように努めたいと思います。同時に、これは私の信念ですが、そのことを通じて日本の都市農村計画・まちづくり・むらづくりの真の発展にも力を尽くしたいと思っております。」

と述べられました。

2009年5月、石田先生は、その思いの途半ばで倒れました。それからの日本の動きを先生はどのように語られるのでしょうか。真の発展に向かっているのでしょうか。でも、先生のお言葉を聞くことはできませんでした。

先生は、この間にも、静かに我々の取り組みをご覧になり、お待ちになっておられたと思っています。私は、先生に計り知れない学恩をいただきながら、その一つもお返しができていません。しかし、私も、それぞれの位置、立場で、“先生から手渡していただいたもの”をそれぞれの鏡とし、より素晴らしい都市づくり、街づくり、村づくりに励みたいと決意しています。そして、それを、“次の世代へ手渡すべきもの”にして、手渡していきたいと考えています。

石田先生、私にとって先生から手渡されたもの、それは「首都直下地震の地獄へのトレンドからの脱却」への微力ながらの取り組みです。

どうぞ見守っててください。そして、ゆっくりとお休みください。

先生最後の著書『日本近現代都市計画史の展開—1868～2003—』のあとがきの最後に、「この本が、高山英華先生と裕子(石田先生夫人)という、きわめて異なる、しかしどちらも大事な立場での日本の都市農村計画にかかわった二人にささげるにふさわしい内容になっていることを願ってなりません」と結んでおられます。いま、先生は、敬愛する高山英華先生と、そして裕子夫人と、毎日どのようなお話をされているのでしょうか。

石田頼房先生、ありがとうございました。